

書塾の仲間たち

第 231 回

がんおん
元恩書塾（東京都八王子市）



●書塾からひとこと●

当塾は、東京都八王子市の片田舎にあります。昭和二十五年四月から亡夫の父が始めたまさに文字通りの「寺小屋」でした。書塾が始まつた当時は、「読み、書き、そろばん」の時代でした。ご近所のお母様方より「ぜひ、子どもたちに書道を教えてください」と熱望されて塾を開くこととなり今日に至ります。古い本堂と台所だけの貧しい寺で、教場にする場所もなく、本堂の板の間でお稽古をしていました。

義父は寺の住職で小学校の教師でもあったため、子どもたちのためならと、多摩地域の教育書道の会に入会しました。その義父の後を継ぎ、亡夫が二代目となり、縁あって嫁いで来た私も即入門。それから四十九年、まさかこのように長く続くとは思いもしませんでした。

しかし、ローカルな土地柄、支部の先生方の高齢化などにより閉塾するところも多くなり、コロナ禍による会員の激減もあって、競書誌の発刊が困難になりました。

門弟の皆さんは塾の継続を願い、私も悩んでおりましたところ、仲間の先生に月刊「書写道」を薦められました。早速、見本誌を一冊送つていただき、お手本を拝見して、素晴らしい内容に感動しました。今まで所属していた会も教育書道で、共通する点も多く、即入会を決意しました。門弟の皆さんにも説明し、賛同を得ました。長年お稽古に励んでこられた有段者の方も、一からのスタートとなることに納得していただきました。令和三年九月より出品を始めました。

門弟の皆さんが明るく、楽しく、元気よく、心豊かに書学に励んでほしい、との亡夫の想いを胸に、皆さんと賑やかにお稽古を楽しんでおります。私も後期高齢者に仲間入りし、若い皆さんからエネルギーを頂き、今後もボケずにお稽古を続けることができればこれほど嬉しいことはありません。

※書塾に連絡したい方は事務局へお問い合わせください。
元恩書塾 藤本 栄華

教職の傍ら、子どもの頃できなかった書道を趣味として四十数年になります。退職後に地域の子どもたちに書道の楽しさを伝えたいと一念発起し、自宅で書道教室を始めてから八年が経過しました。一人、二人と子どもたちが来てくれ、日々教えることを楽しみしながら素直な子どもたちの成長を見ることは何よりの喜びです。

最近では書道を通して、障がいがある方や高齢者がリハビリのため毎月通われるつぶば市内のセンターとも交流をしていました。二年前からセンターの壁に作品を掲示させていただく機会を得て、新年に「謹賀新年」と書いた条幅をお届けしたところ、利用者の方々に大変喜んでいただきました。予想外の反響に私自身が驚き、それ以来、二週間ごとに書作品を張り替えるようになりました。題材は月刊「書写書道」の課題や高齢者がご存じるようになります。この意外な反響に私も喜んでいます。

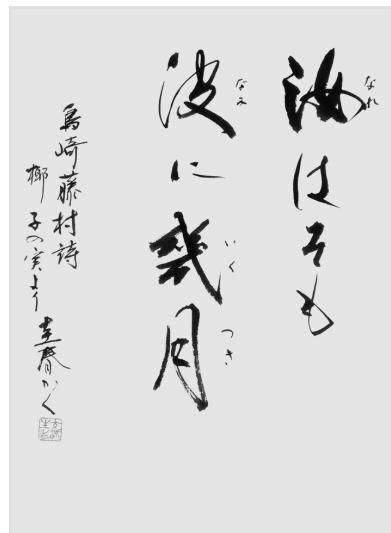
私は小学一年から書道教室に通い始め、二年生の秋から本格的に書道を始めました。きっかけは、字を書くことや絵を描くことが好きだったからです。実際に取り組んでみると、想像していたよりもむずかしくて、細かい所まで一画一画丁寧に書かなければいけないということを、教室に通い始めたから知りました。先生のお手本のようにきれいに書き、たくさん練習したこと、少しずつ上達していました。

三年生になり、月刊「書写書道」の競書出品を始めました。初めて本が届いた時は、どのような課題なのか不安でしたが、自分の作品が写真版にのった時、少し自信がつきました。それから、学校の友達に「字がきれいだね」と言われることが増えたり、漢字ノートに花丸がもらえるようになって、字を書くことがもっと楽しく感じられるようになりました。特に、「はね」や「はらい」など、集中して自分の思い通りの字形が書けるとうれしむようになりました。

歴史に残る俳句や短歌、歌、味わいのある「言葉」を「書」で表現すること、「言葉」と「書」が一体となって人の心に届くということ、何と素晴らしいことかと思います。「言葉の魅力」「書の魅力」を改めて教えていただき、日本武道館の教書を友として、これからもより良い作品づくりに取り組んでいこうと思います。

「言葉」の魅力、「書」の魅力

つくば並木書道教室（茨城県つくば市）**田上圭春**



私と書写書道 第231回

先生のように美しい字を書きたい

愛知県名古屋市立本郷小学校五年 **永塚みもざ**



書道を始めてからこれまでに二回、賞をいただきました。今後はさらに上の賞をいただけるよう、楽しみながら努力していきたいです。そして、いつも優しく教えてくださる書道の先生のような美しい字を書けるようになりたいです。